陝西省智果寺永楽北蔵とその表装に用いられた染織品について

呉　爽

はじめに

染織品は、繊維そのものに耐久性が乏しいため、伝世しにくい。また、建築、書画、彫刻に比較すると、衣類や調度品という日常的な実用品の形で用いられる染織工芸は、軽視される傾向があった。その結果、世界的に見ても、現存する古代の染織品のほとんどは、埋葬地から出土したものである。

明代の染織品を考えるとき、現存遺物が最もまとまった件数がみられ、かつまたよく保存されているのは、日本の茶文化の中で珍重されてきた「名物裂」に含まれる一群の染織品である。日本の中世から近世初頭にかけて、勘合貿易や朱印船貿易などに伴い、数多くの染織品がはるばると海を渡り、日本に舶載された。これらの染織品は舶載当初、高僧の袈裟や猿楽の装束、寺社の戸帳や打敷などとして使用された。やがて茶道の興隆にともなって、茶の世界に持ち込まれ、茶入の仕覆や表装裂として用いられた。当時の茶会記にはしばしばこれらの染織品の記録がみられ、茶人たちがそれらに固有の呼称をつけて珍重するようになったことがうかがえる。裂地の断片までも大切にされ、アルバム状に貼付した裂手鑑が多く作られた。明代の染織工芸を論じる際、名物裂は欠かすことのできない貴重な宝庫といえる。

しかし、名物裂の故郷である中国では、「名物裂」という名称や存在すら、知っている人はほとんどいない。一方、日本の名物裂を研究するには、中国の染織の状況も考慮にいれなければならないが、従来の名物裂研究では、中国側の同類品と比較されることは少ない。一九六八年に西村兵部氏を代表として「名物裂と中国元明の染織」という研究課題が行われたが、中国の情報が限られていた当時の困難な研究環境のせいか、研究成果である『名物裂』[1]という本の中では、中国の作品は一、二例しか言及されなかった。また、小笠原小枝氏が織金の完成について検討した際にも[2]、中国の状況については

近年のわずかな出土例だけで考察が行われた。中国の遺品がほとんどまったく知られていなかったため、なかなか有効な比較研究はできなかったのである。

しかし実際には、明の染織品は仏教経巻によって保存されたものが驚くほど多いのである。筆者は、こうしたこれまでの中国側での資料の不足を補うものとして、陝西省の智果寺に所蔵されている永楽北蔵の表装に用いられた染織品に注目した。智果寺蔵北蔵は全部で四一三九冊が残っており、綾、平絹、錦、緞子、木綿などで表装されている。それらの裂の模様は約五百種類にのぼる。この表装に用いられた染織品は、もともと内庫及び承運庫、広恵庫、広盈庫、贓罰庫[3]に保存された織物である。経巻は北京で表装されて各地の寺院に運ばれた。これらの織物のほとんどは明代前期のものであり、一部は宋・元の遺品である可能性もあるとされている[4]。いずれにせよ、宮廷における最高級の織物で表装された巻が多い。それらの経巻中の『萬善同帰巻第一』の末尾に「慈聖宣文明粛皇太后寶」という慈聖皇太后の欽印も確認されたため、洋県蔵大蔵経の価値が確実なものと認定されたのである。

そこで本稿では、まず永楽北蔵の歴史を整理し、永楽北蔵に注目する理由を述べる。つぎに、筆者自身の調査にもとづいて、世界各地に散在する永楽北蔵の現存状況をまとめ、智果寺蔵永楽北蔵の価値と位置づけを明らかにする。さらに、現地洋県で調査した碑文や関連資料をもとに、智果寺の歴史や永楽北蔵の下賜状況を考察し、長年放置されて虫損や劣化によって傷んだ経冊を修復する作業を紹介する。表装に用いられた染織作品を技法や文様を検討し、さらに日本の名物裂と比較し、名物裂の再検討を行う。その上で、表装の意匠における等級性について考察する。

一、永楽北蔵の成立と現存状況

中国では、四世紀の末から漢訳仏典を蒐集・編纂する作業が行われてきた[5]。北朝の北魏では、これらの諸経律論を一切経とよび、南朝の梁では大蔵経とよんだ。隋から唐初にかけて大蔵経の内容は次第に定まり、写経の書式も整頓をみた[6]。開元十八年（七三〇）に編纂された『開元釈教録』と貞元十五年（七九九）に編纂された『貞元新定釈教録』は、唐から五代、北宋初までの大蔵経の根幹となった。書写によってひろく伝播された大蔵経は、印刷技術の発展にともない刊刻版が誕生すると、さらにひろく流布するようになった。

北宋の勅版大蔵経は刊刻された最初の大蔵経[7]であり、太祖の開宝四年（九七一）に蜀で開版され、太宗の太平興国八年（九八三）に完成された。その印刷は、開封の太平興国寺に設置された印経院で行われた。これは宋朝の功徳事業で、西夏、高麗、日本などの近隣諸国にも贈与された。北宋勅版大蔵経の雕印から半世紀を経ずして、高麗では顕宗（一〇一〇～一〇三一）のとき、契丹（遼）では興宗（一〇三二～一〇五二）の世に[8]、それぞれ大蔵経の出版が企図された。

次いで、金の皇統九年（一一四九）頃、尼僧崔法珍が発願し、山西省解州の天寧寺で大蔵経を開版し、大定十八年（一一七八）金朝廷に一蔵を献上した。その後、版木は北京弘法寺に移管され、そこで印刷や補刻が行われた。[9] 金刻大蔵経板は、次の元の時代まで印経をしていた。一方、地方では私版大蔵経の刊刻も宋の時代から展開しつつあった。崇寧万寿蔵（東禅寺版蔵経）、毘盧蔵（開元寺版蔵経）、杭州蔵（普寧寺版蔵経）、思渓蔵、磧砂蔵などが挙げられる。[10] 私版大蔵経はまた周辺諸国にも流通し、仏教文化の伝播や発展に大きな貢献を果たした。江戸時代に刊刻された天海版と黄檗版大蔵経はともにこれら私版大蔵経を底本にしたものである。[11]

明代に入ると、漢訳蔵経の雕版がますます盛んに行われた。これらの版本は今日、洪武南蔵[12]、永楽南蔵[13]、永楽北蔵、武林蔵、徑山蔵[14]と呼ばれている。洪武南蔵の雕造は洪武帝の敕によったものであり、洪武五年（一三七二）南京蔣山寺で開版され、建文三年（一四〇一）完成された。しかし、永楽六年（一四〇八）頃、金陵天禧寺（のちの大報恩寺）に保管された洪武南蔵の版木が焼失した。そこで、永楽十四年（一四一六）、永楽帝は大蔵経の全面的な再構成を命じ、同十七年（一四一九）年の末までに永楽南蔵が完成をみた。これとともに、永楽帝は北京で新たな大蔵経、いわゆる永楽北蔵の編纂を展開した。北蔵の開板は永楽十八年（一四二〇）から正統五年（一四四〇）に至る二十年の歳月をついやし、『大般若経』から『大明三蔵法数』まで、六百三十七函、計六三六一巻を雕造した。雕版は中央政府司礼監が管理し、禁裏の東偏にある祝崇寺内の漢経廠で行われた。

こうして明初の南・北両京では相次いで大蔵経（永楽南蔵と永楽北蔵）が編纂され、以後明代を通じて印造がおこなわれていった。永楽南蔵の版木は南京報恩寺に保管、印造されていたが、実費をもって入手希望者（請経者）に頒かたれており、しかもその受注から印造・製本にいたる工程をやがて民間業者（経舗）が代行するという状況も出現した。これに対して永楽北蔵は、完成後その版木は北京城内の漢経廠に保管され、特別の事情がない限り印造されることはなかった。ゆえに、永楽北蔵は永楽南蔵より印造・製本や表装の質が高いと思われる。事実、現存する永楽南蔵――中国国家図書館の四部、甘粛省図書館の六三四五巻、山口県快友寺の五四四四巻、[15] 立正大学図書館の五五八巻を見ると、いずれも紙で表装されたものであり、およそ民間で印造・製本された簡素なものと考える。これに対して永楽北蔵の現存品が高級な染織品で表装されているのは、右の事情によるのである。

さて、永楽北蔵はその後多くが散逸したが、今日、四千巻以上の巻数がまとまって伝わっているものに、故宮博物院蔵本、甘粛省張掖大仏寺蔵本、重慶図書館蔵本、及び今回新しく発見され修復作業が進められている陝西省洋県智果寺蔵本がある。この他、雲南省図書館、北京法源寺、北京房山雲居寺、山西省小西天仏寺、山東省図書館、洛陽白馬寺、中国仏教協会、アメリカのプリンストン大学図

書館とシカゴ大学、日本の成田山仏教図書館などにも一部収蔵されている。以下に、それぞれについて表装の状況に注目しながら概観しておきたい。

1、故宮蔵北蔵本[16]

北京の故宮蔵北蔵は、元来は明の皇宮に、現在は故宮図書館に収蔵されている。一六六二部、六九三〇巻[17]、六九三函あり、全て黄色い紋綾で表装されている。

2、甘粛省張掖大仏寺蔵本[18]

木造涅槃大仏で知られる大仏寺には、明代の仏経が四種類収蔵されている。永楽北蔵の他、明の『大般若波羅蜜多経』の泥金書写本、明の「五大部」仏経、及び万暦姑蘇坊刻本仏経である。永楽北蔵は初刻版であり、一六二一部、六三六一巻がある。元来十個の「貯経厨」に収蔵された。厨ごとに六四の函、函ごとに十巻、全部で六三六の函がある。あわせて英宗朱祁鎮の詔書も発見された。文頭は朽損して不明であるが、文に

□□地保民之心、恭成皇曾祖考之志、刊□□蔵経典頒賜天下、用廣流傳。茲以一蔵安置陝西甘州臥仏寺、永充供養。聴所在僧官僧徒看誦賛揚、上為国家祝釐、下與生民祈福。務須敬奉守護、不許縦容閑雑之人私借観玩、軽慢褻瀆、致有損壊遺失。敢有違者、必究治之。諭。正統十年二月十五日

図1　『大般若波羅蜜多経』
甘粛省張掖大仏寺蔵本

という。大仏寺北蔵の閲覧が厳しく制限され、今日までよく保存されてきたことは、この英宗の詔書と無関係とはいえない。北蔵は正統六年（一四四一）北京から運ばれ、四年かかりで搬送が終わった。装幀には浅葱色の無地の綾が用いられた巻が多い。

これに比して、泥金を用いた書写本である『大般若波羅蜜多経』（「金経」と通称される）の方が派手に装幀されている。「金経」は、明の正統六年永楽北蔵が張掖に運ばれた時の勅使である御馬監太監兼尚宝監太監魯安公王が「上以図報列聖厖賜之洪恩、下以孝資祖宗栽培之厚徳」のため、諸方の書画名士を集め、金粉や銀粉をにかわで溶いたいゆわる泥金で『大般若波羅蜜多経』（図1）を書写させ、綾や緞子で装幀させた折本である。紙は明の靛青紙で、経文の中の「佛」「菩薩」の字句には金泥を用い、他の文字は銀泥で書写されて

いる。表紙は全て蘇州や杭州の綾や緞子で装幀されている。毎函の第一巻は色とりどりの刺繍で龍の図様があらわされ、豪華である。他の経冊は、黄檗、浅葱色、赤紅、水浅葱、紺色の紋綾で表装されている。明の「五大部」仏経及び明の万暦姑蘇坊刻本仏経もまた、精緻な紋綾で装幀されている。

3、重慶図書館蔵本[19]

民国十四年（一九二五）に雲陽の程徳全が北京で購入、雲陽の弥勒院に寄付したものである。全部で一六二一部、六三六一巻、六三六函があり、このほか続入蔵経四一函、四一〇巻がある。中華人民共和国が成立した初期、万県人民政府はこれを西南人民図書館（重慶図書館の前身）に寄付した。程徳全の入手より以前に、本立堂（現在北京瑠璃廠辺りに位置し、明清時代に本の印刷・修繕・販売をおこなった機構）によって、欠本が清の龍蔵で補われ、また書写による修繕も行われたとされる。下賜の年代と流布の経緯は不詳であり、装幀の様子も不明である。

4、プリンストン大学図書館蔵本[20]

これは明の皇宮に収蔵されたものであり、初刻本と続刻本を合わせて三七五七冊がある。瑞安公主（神宗の同母妹）の夫万煒が執筆した題記や「万煒之章」「太傅之印」の印が何箇所かあるとされる。この他、康熙辛亥年（一六七一）行瑞という僧人の題記もみられる。装幀については、龍達瑞氏によれば、智果寺蔵本と異なり、むしろ故宮蔵本に似ているところが多い。

5、成田山佛教図書館蔵本（図2）

成田山蔵本はわずか二八七巻であるが、保存状態はとてもよい。収蔵の経緯については現在詳細不明である。表装には錦、金襴、緞子、粧花緞[21]、綾などが用いられている。装幀は智果寺蔵本と近似するところが多く、同時代に下賜された可能性が高い。成田山蔵本については、筆者は現在調査中であり、詳細は別稿に譲る。

6、雲南省図書館蔵本

ごく最近公開された雲南省図書館蔵本も注目すべきである。まとまったものではないが、保存状態はとてもよくて、金襴で表装されたものが多い。全部で二一一九冊を数える。文様も智果寺蔵本と似ており、同時代に下賜されたものと推測できる。残念ながら、装幀には改装されたものも多い。

以上を簡単にまとめると、故宮蔵蔵本の装幀は黄色い紋綾で、単色ではあるが、皇帝を象徴する黄色を用いていることから、皇宮に収蔵されるものの特殊性が見られる。これに対して、張掖大仏寺蔵本には黄色を用いておらず、浅葱色のような地味な綾が多い。その一方で、同時期に同地で行われた写経の装幀の方が、むしろ金泥や

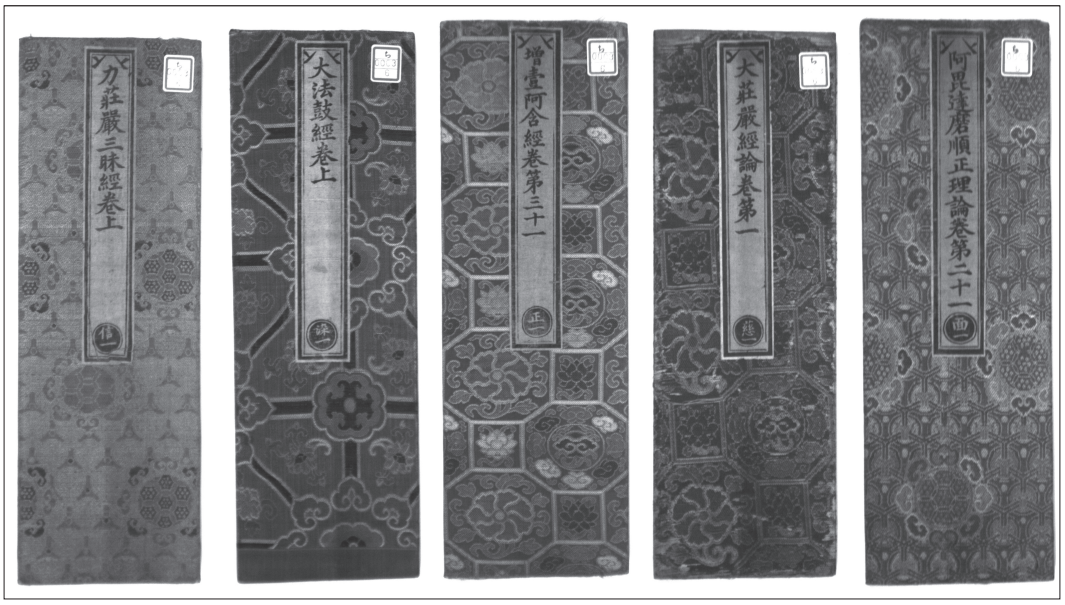

図２　成田山仏教図書館蔵本

龍の刺繍が施され、華やかである。智果寺蔵本は、金襴や錦を用いたものの割合や色彩、文様の種類の点で成田山蔵本と雲南省図書館蔵本に似ており、おそらく同時代に下賜されたものである可能性が高い。しかも、日本の名物裂と最も類似した裂が用いられた大蔵経の表装は、このタイプのものなのである。これが当時の日明間の交流の状況と何らかの関係があるかについては、今後の課題にしたい。

二、智果寺の歴史と北蔵の下賜

智果寺は、現在陝西省の西南部の、洋県謝村鎮智果村智果中学の東に位置する。清の張鵬翼等纂修「洋縣志」寺観志の知果寺条[22]には、

知果寺、縣西二十八里。唐儀鳳間建、宋元重修。明万暦間、某貴妃捐金、命太監同知府重修、増建蔵経楼。経典題記俱存在。

とあり、智（知）果寺は唐の儀鳳年間（六七六～六七九）に建てられた後、歴代にわたり建て直され、明の万暦年間に再興されたという歴史がみられる。現在は、大仏殿と蔵経楼しか残っていない。この二棟は一九九四年と二〇〇二年に大修理が行われている。筆者が二〇一一年に調査に訪れた時には、他の附属建築はほとんど見るかげもなくなっており、地蔵殿と祖師殿は基壇しか残っていなかった。また、五祖殿や羅漢殿、孤魂殿、文昌殿、龍神殿は、壁や棟梁が腐朽し、扉や窓も失われていた 。廂房と山門は隣の智果中学に占められ、これらもまた壊れてしまっていた。

しかし幸い、大仏殿の後ろ、蔵経楼の前に一基の聖諭碑が残っている。縦二三五センチ、横一〇九センチ、厚さ十八センチのものである。碑陽の上に万暦皇帝の「聖諭」の二文字、真ん中に「聖母印施仏蔵経序」、下に「聖母印施仏蔵讃有序」、そして碑陰の上に「永鎮漢洋」、下に「勅賜智果寺頒布蔵経碑記」という内容で構成されている。敕版大蔵経の下賜は、仏寺にとって栄誉のことであった。北宋以降、天下の名山古刹に経蔵記や転輪大蔵記の建碑が流行した。北蔵は「特賜」や「奏請」による下賜以外に入手の手段はなかった。これをうけた仏寺は、聖恩に感謝し恩恵に報いるため勅賜の蔵経護敕を勒石する風が盛んであった。こうした諸記録は、寺志や地方志、文集などに散見される。洋県の聖諭碑はその一例である。以下、筆者が現地で記録した聖諭碑の碑文のうち、大蔵経に関係のある箇所をあげよう（文字は原文に最も近い字体を用いた）。

（一）皇帝勅諭洋縣智果寺住持及僧衆人等
　朕惟佛民之教具在經典用以化導善類覺悟群迷于護國佑民不為無助茲者
聖母慈聖宣文明肅皇太后命工刊印續入藏經四十一函並舊刻藏經六百三十七函通行頒佈本寺爾等務
須莊嚴持誦尊奉珍藏不許諸色人等故行褻玩致有遺失損壞特賜護持以垂永久欽哉故諭
廣　運
萬暦十四年九月
之　寶

（2）禦制
聖母印施佛藏經序
難窮惟茲藏經繕始於永樂庚子梓成于正統庚申由大乗般若以下計六百三十七函我
聖母慈聖宣文明肅皇太后又益以華嚴懸談以下四十一函而釋典大備夫一心生萬法萬法歸
萬暦十四年九月　　日

この碑文から次のようなことが分かる。まず、智果寺蔵大蔵経は永楽庚子（一四二〇～一四四〇）から雕版を開始し、正統庚申（一五八四）に完成したものであるという。碑文の年号から判断すれば、ここにいう「皇帝」は万暦帝を指す。しかも、智果寺蔵大蔵経、特に『華嚴懸談』以下の四一函の続入蔵は、いわゆる「聖母慈聖宣文明肅皇太后」が参与して下賜したものである。また、下賜された大蔵経の内容と函数も分かる。つまり、正統年間に下賜された大乗般若経以下の六三七函に加えて、華嚴懸談以下四一函の続入蔵も含まれる。全部で六七八函あることになる。

では、ここにいう「聖母慈聖宣文明肅皇太后」とはいったい誰を指すのか。『明史』巻一一四・孝定李太后の伝の前半には、

孝定李太后神宗生母也、激県人。侍穆宗於裕邸。隆慶元年三月、封貴妃生神宗。即位、上尊号曰慈聖皇太后。旧制、天子立尊皇后為皇太后、若有生母承太后者、則加徽号以別之。是時、太監馬保欲媚貴妃、因以竝尊風。大学士張居正下廷臣議、尊皇后曰仁聖皇太后、貴妃曰慈聖皇太后、始無別矣。

とあり、「聖母慈聖宣文明肅皇太后」は万暦帝の生母、孝定李（彩鳳）太后であることが分かる。もともと貴妃であった彼女は、神宗朱翊鈞（万暦帝）を生んだため、元皇后とともに「皇太后」と称せられるようになった。万暦帝が生母をどれほど尊敬したかが窺える。

慈聖皇太后は実に仏教信仰の篤い人であった。『明史』巻一一四・孝定李太后伝の末に「好仏、京師内外多置梵刹、動費鉅万。帝亦助施無算。居正在日、嘗以為言、未能用也（仏教を好み、京師の内外に梵刹を多く置き、つねに巨万を費やした。万暦帝も助けて多数を施した。張居正はこれを以て諫言したが、彼の意見は用いられなかったのである）とあり、彼女の仏教信仰や万暦帝がその影響を強く受けたことがわかる。

とりわけ注目されるのが、万暦年間に、聖慈皇太后が北蔵下賜に関与している事例が多いことである。既に野沢佳美氏が指摘したように、江蘇省の金山寺、画禅寺、静慧寺、福建省の華蔵寺、河北省の瑞峰庵、江西省の黄龍寺、瞻雲寺、浙江省の光孝寺、楞厳寺、山西省の霊厳寺などの諸寺の場合も、慈聖皇太后が直接もしくは間接的に北蔵を下賜したという。[23] 例えば、光緒『蘇州府志』巻四二・寺観四・画禅寺に引かれる清・彭啓豊撰「画禅寺記」には、「……明神宗朝、有住持僧清庵者。行脚至京師、求頒龍蔵。粛皇太后、聞而賜之」とあり、慈聖皇太后が常に北蔵を下賜していたことが推測される。

そうした中で、特に洋県には、慈聖皇太后が大蔵経を下賜した経緯について、こういう伝承がある。[24] 当時慈聖皇太后は、不治の眼病に倒れた。太医たちが皆手をつかねていたところ、智果寺の僧が上殿し、皇太后の眼病を治した。皇太后は感謝の意を表するため、智果寺に大蔵経を下賜したという。この伝承が何らかの史実によったかは判断できないが、皇太后が智果寺に北蔵を下賜したことには彼女自身の事情と関係があったことが窺える。

智果寺に北蔵が下賜されたのは万暦十四年（一五八六）である。この年には、実に特に多数の北蔵が各地に下賜された。現在確認する限りでは、塔院寺（山西太原五台山）、黄龍寺（江西九江府廬山）、普済寺（浙江寧波府定海県）、万年寺（浙江台州府天台山）、宝（普）陀寺（浙江寧波府普陀山）、地蔵寺（安徽池州府九華山）、瓦官寺（南京）、報恩寺（南京）、海印寺（山東青州府牢山）、化城寺（安徽池州府九華山）、そして智果寺（陝西漢中府洋県）の合計十一件の下賜の事例が数えられる。

『法宝総目録』第二巻所収の「大明三蔵聖教北蔵目録」に「御製新刊続入蔵経序」が収められている（二九八頁）が、そこには「大明万暦十二年十一月二十日」との日付がしるされている。さらに

『憨山老人夢遊集』巻五十三の憨山老人自序年譜実録上の万暦十四年丙戌の序に、

予年四十一。是年、頒蔵経。先国初刻蔵、有此方撰述諸経未入蔵者。今上聖母、命補入之。刻完、皇上勅頒十五蔵、散施天下名山。首以四部施四辺境、東海牢山・南海普陀・西蜀峨嵋・北辺蘆芽。

とあり、続蔵の追雕作業が完了した二年後の万暦十四年に、天下の名山を始めとして、十五蔵が下賜されたという。この記述からみれば、万暦十四年に下賜された北蔵の数は現在確認できるものよりはるかに多かったことが推測できる。しかも、北蔵を大規模に下賜したのは、慈聖皇太后が命じた続蔵の追雕と深い関係があるとみられるのである。

三、智果寺北蔵に用いられた染織品の検討

智果寺蔵大蔵経はもともと寺の蔵経楼に収蔵されていたが、現在長年放置されて虫損や劣化によって傷んだ経冊を修復する作業のため、ほとんどが洋県文博館に移された。現地の蔵経楼にはわずか六巻が収蔵されている。近年智果寺大蔵経は学界で注目されるようになり、有名な学者たちが相次いで蔵経について考察している。修復プロジェクト[25]は現在西北大学仏教研究所が担当している。修復プロジェクトは主に大蔵経の整理と研究という二つの方面から展開されている。整理の作業は主に大蔵経の編目、命名、撮影、集録、索引の作成、当初の千字文による編成を復元し、欠けた経帙を明らかにすること、写本と刻本を分別し、破損のある経典に糊付け・乾燥・埃払いなどの処置を行うことである。研究の作業は、刻印・頒布・下賜・収蔵の歴史、版本の考察と校正、蔵経の内容と価値、及び洋県の文化との関係など大蔵経の総合的な考察である。現時点においては、整理作業の第一段階がほぼ終わったところである。こうしたなかで、表装の染織品の調査・考察は、当初必要性が認識されていなかったが、筆者の参加によって関心が向けられるようになったのは幸いである。

洋県所蔵の永楽北蔵は全部で四一三九巻が現存しており、経冊は綾、絹、錦、緞子、木綿などで表装されている。模様は約五〇〇種類があり、明代織物技術の最高水準を代表するものとも言える。まだ修復中なので、一部しか実見できないが、調査したいくつかの経冊について、日本の関連作品と比較しながら検討したいと思う。

五つ爪の竜文

図3は「大般若波羅蜜多経」の表装裂である。縁のところはかなり破損するが、真ん中の文様はまだはっきり見える。典型的な金襴類で、真朱綾地の上、霊芝雲の間に五つ爪の竜の飛ぶ様が織り出されている。図4の「大般若波羅蜜多経第四」の表装裂も典型的な金

図３　「大般若波羅蜜多経」の表装裂
陝西省洋県智果寺蔵

図４　「大般若波羅蜜多経第四」の表装裂
陝西省洋県文博館蔵

襴類で、山吹色の繻子地に平金糸で織り込まれた五つ爪の竜と唐草化された雲が配置されている。竜の目が画竜点睛のように生き生きとして真に迫っている。五つ爪のところは力がこもっており、われわれを惹きつける生気を感じさせる。よく保存されたため、光をうけて浮き沈みする金色のかがやきとかげりとがダイナミックな竜のうごきを感じさせる。あか抜けした格調高い作行きであり、織技の正確さが気品さえ添えている。両方とも、竜の飛ぶ方向を一段ごとにかえて変化を与え、頗るリズムのよい作品である。龍文の構図と織り方はとても相似しており、同じ系統のものといえよう。

江戸初期ごろの渡来裂には竜文が最高の品位を誇る裂として尊ばれ、仏教関係に主として用いられていたものであるが、のちに茶人に迎えられ、仕覆等に仕立てられたものである。図５の裂は名物裂の中で名高い珠光緞子である。さびた花色の繻子地に、渋い萌黄色で細蔓の小花唐草に竜が配される。この緞子の本歌はもともと東山殿（義政）の装束裂であったが、のち徐熙筆「鷺図」の表装につかわれた裂といわれるが、その掛幅は所在不明である。[26] また松屋肩衝茶入の袋（図６）に使われている竜三爪緞子も本歌にあてられている。なお、ここの竜文は五つ爪の竜ではなく、三つ爪の竜である。簡略された竜文であっても、この動きには雄勁なところがあり、渋みのある品のよい裂である。

丸竜の場合もこういうような爪の区別が見られる。図４は「大般

図５　珠光緞子
東京国立博物館蔵

若波羅蜜多経第二」の表装裂であり、利休茶の綾地に平金糸で織り込まれた霊芝雲と竜の丸文が配置されている。箔と糸は剥落したところも多いが、丸竜の構図と爪のところがはっきり見える。前述した竜文と同じく、五つ爪をふるうような勢いよいさまが生き生きと表現される。図7は宗無肩衝茶入の袋に用いられる納戸地丸龍緞子である。『今井宗久日記』『神谷宗湛日記』にはこの茶入の袋として「ケウロク純子」「小紋から草純子」をあげている。[27] いま伝えられるものは茶地角竜金襴（図8）とこの緞子であって、上記日記類から察するところ、珠光緞子のようなものと考えられるが、竜文である

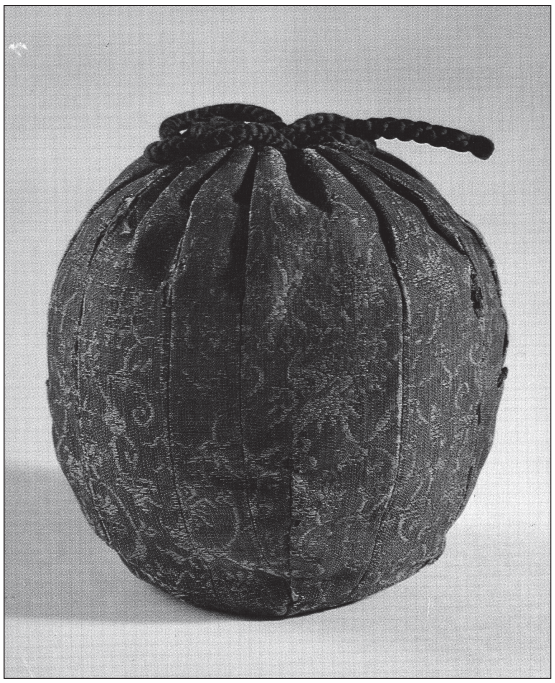

図6　竜三爪緞子（松屋肩衝茶入袋）
根津美術館蔵

図7　納戸地丸龍緞子（宗無肩衝茶入袋）
徳川黎明会蔵

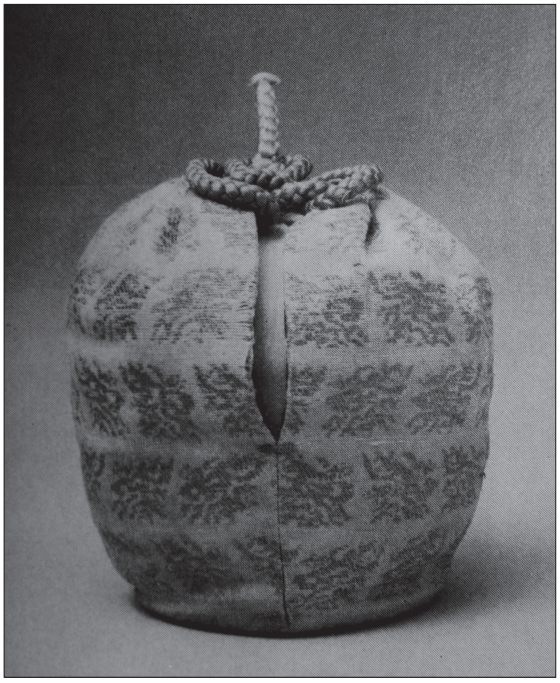

図8　茶地角竜金襴
根津美術館蔵

点は共通し、この丸竜緞子を「ケウロク緞子」[28]にあてることができるであろう。納戸地丸龍緞子と茶地角竜金襴における竜文は、いずれも珠光緞子と同じく、三つ爪の竜である。ケウロク緞子にはかなり竜文が多く、しかも現存品はほとんどこういうような三つ爪の竜であることが推測される。この他、東京国立博物館に収蔵される瓦燈竜金襴（図9）、根津美術館に収蔵される相坂金襴（図10）における竜文はいずれも三つ爪の竜である。中国では、官窯では龍の爪は五本とし、民窯では四本または三本とされる[29]。おそらく織物の世界でも同じ規定があると考えられる。茶会記の中には、掛け軸の表装や仕覆が記録されている。『神谷宗湛日記』天正二〇年条には「ケウロク段子」の文様の一つに関して、特に「五爪ノ龍」という詳しい注記を加えている。しかし、現存するその時期の五爪竜の「ケウロク段子」はなく、上記した三つ爪の龍文からしかその様子が窺えない。永楽北蔵は皇帝が下賜した経巻であるから、織染局[30]で生産されたレベルの高い織物で表装されたことが想定できる。

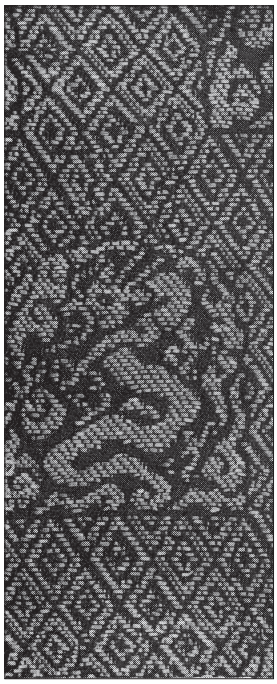

図9　瓦燈竜金襴
東京国立博物館蔵

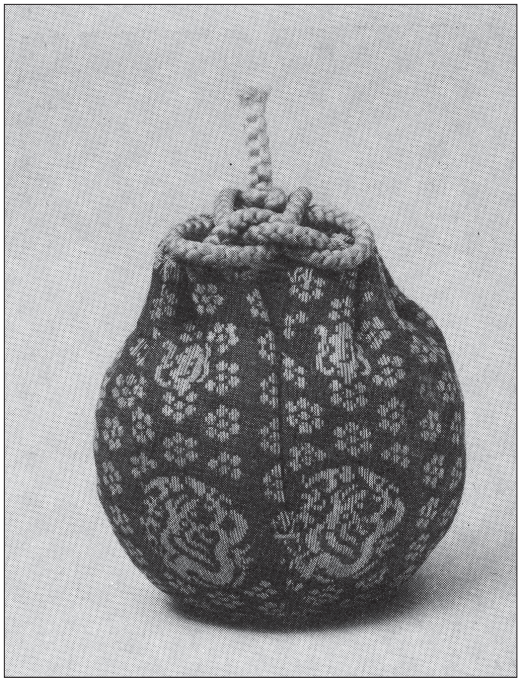

図10　相坂金襴（古瀬戸丸壺屋入「相坂」の袋）
根津美術館蔵

連雲文

図1の「大般若波羅蜜多経」の表装裂は、また典型的な連雲文ともいえる。手は三つ生え、雲頭に耳が三つ生えた形（三手三耳雲）を取っている。上の手と下左の手はまた上下の雲と連結する連雲文である。名物裂の中でも、同系のものとして、図11の富田金襴があげられる。戦国の武将富田左近将監（?～一五九九）の愛好した裂と伝えられるだけあって、紫の地色に金色が映え、非常に雄渾で華やかな雰囲気をもつ金襴である。この金襴は打返しになった霊芝雲を基本にして、それを繰り返して帛面全体をおおい、地間は宝尽しと小さい霊芝雲の文をうずめる。同様の文様でいくぶん硬い感のあ

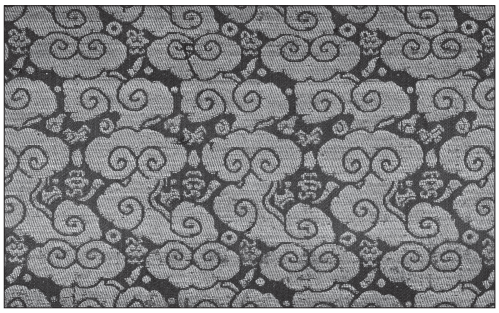

図11　富田金襴
東京国立博物館蔵

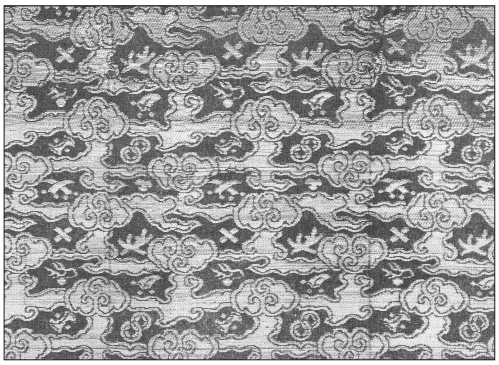

図12　安楽庵手金襴
東京国立博物館蔵

るものが、天竜寺塔頭慈済院の空谷明応（仏日常光国師）所用と伝えられる袈裟の条葉・縁に用いられており、『古今名物類聚』ではこれを嵯峨裂としている。この霊芝雲はまだ手や耳などの装飾が少なく、ただ雲尾のところに手が生え、下の雲と連続する。その他、連雲系統のもとに、安楽庵手金襴（図12）と呼ばれるものがある。安楽庵手とは京都誓願寺竹林院に住した安楽庵策伝（一五五四～一六四二）が所持していた袈裟の金襴類といわれる。名物裂として上品とはいえず、様式化が目立ち、大味の感をいだかせるものである。両側と下から手が生え、周りの雲と連続する形を取っている。手の動きには縛られるような硬い感があり、富田金襴の型に拘りながら、新しく展開しようとする動きも見られる。図4の「大般若波羅蜜多経第二」の表装裂の雲形になると、完全に雲と雲の間の連続が破られ、独立した自在な四つ手雲に発展した。以上検討したように、連雲から四つ手雲まで右のような様式上の変化があると考える。

鳳凰文

図13は「大般若波羅蜜多経第三」の表装裂であり、千草色の繻子地に、平金糸で織られた丸鳳と花が配置され、この間を卍文で連結した見事な構成である。鳳凰が双翼を広げ、尾をなびかせ、悠揚とかまえた感じである。尾のまわりをまた唐草でうずめる。繻子織で

図13 「大般若波羅蜜多経第三」の表装裂
陝西省洋県文博館蔵

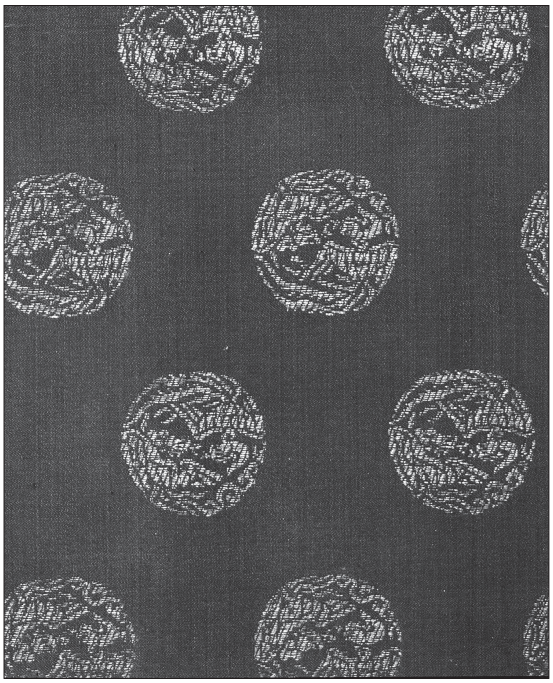

図14　二人静金襴
東京国立博物館蔵

は地の部分の光沢が強く反射し、金色の照りが強くて、豪華な感をあたえる。また地と文との反射が相殺して、かえって模様の印象を少し弱める。この裂は名物裂の中の二人静金襴（図14）と匹敵できるよい作品である。名高い二人静金襴は、一般に極古渡りなどと称され、宋、元の製になるものといわれる。深みのある黒鳶地に双鳳の丸文様が平金糸であらわされ、地組織は四枚綾となっている。綾織では地の部分の反射が繻子織ほど強くなく、全体に落ち着いた感じをあたえる。二匹の鳳凰は尾をなびかせて円を構成している。箔は剥落したところも多いが、底光りして、重厚さを感じさせ、地の黒鳶色も落ち着いて気品が高い。

調査で実見したわずかな経巻のうち『大般若波羅蜜多経』の表装は、現在調べたところ、すべて龍文や鳳凰文の高級な金襴で装幀されている。『大般若波羅蜜多経』は、大乗仏教の基礎的教義が説かれている長短様々な般若経典を集成したものである。大蔵経の般若部に属され、千字文による編成の天字号から奈字号まで、必ず最初に置かれる六百巻の経典である。般若部の次は宝積部であり、その最初の経巻は菩薩の修行や授記に関する『大宝積経』の百二十巻である。今回実見した「大宝積経巻第一百二」は、舛花色地の蓮唐草金襴で装幀されている。これに対して、史伝部の経典である『集神州三宝感通録』は、漢時代から初唐時代に至る約六百年の間に現れたさまざまな霊異を集録した一書であるが、智果寺北蔵中の同経は地味な素文の紺布で装幀されている。同じく大蔵経の経典であるが、なぜその表装にはこうした差別があるのだろうか。

『大唐六典』によると、内府の蔵書の装丁は次のようであった。

甲部（経）鈿白牙軸　黄帯　紅牙籤
乙部（史）鈿青牙軸　縹帯　緑牙籤
丙部（子）彫紫檀軸　紫帯　碧牙籤
丁部（集）緑牙軸　朱帯　白牙籤

経史子集の書籍はそれぞれ異なる材料や色の軸、帯、籤で区別されている。これは、書籍に対してその内容に観念的価値観を投影し、意匠の部品を選んでいるのではないかと考える。また、周密『斉東

野語』[31]に収録された「紹興御府書画式」には、南宋宮廷における書画の装幀や収蔵に関する制度が記されている。

出等真跡法書。両漢、三国、二王、六朝、隋、唐君臣墨跡。
用克絲作棲台錦縹。青緑簟文錦裏。
大薑牙雲鸞白綾引首。高麗紙贉。
出等白玉碾龍簪頂軸。或碾花。
檀香木桿。

上、中、下等唐真跡。内中、上等、並降付米友仁跋。
用紅霞雲鸞錦縹。碧鸞綾裏。
白鸞綾引首。高麗紙贉。
白玉軸。上等用簪頂、余用平等。檀香木悍。

次等晋、唐真跡。並石刻晋、唐名帖。
用紫鸞鵲錦縹。碧鸞綾裏。
白鸞綾引首。蠲紙贉。
地等白玉軸。
引首後贉巻縫用御府図書印。
引首上下縫用紹興印。

これにより、書画作品は等級によって、装幀の材料、色や文様に差異が設けられたことが具体的にわかる。例えば、出等（上等）の真跡法書（両漢、三国、二王、六朝、隋、唐君臣墨跡）は克絲[32]の棲台錦縹、上、中、下等真跡は紅霞雲鸞の錦、次等の晋、唐晋、唐真跡が鸞鵲の錦縹で表装されている。鈎摹の六朝真跡になると、ただ青の棲台錦で表装されている。

明の宮廷装幀については、関連史料が見つけられなかったため、詳細は不明である。ただ、南蔵の場合は、『請経条例』によると、その用紙を「上等の連四紙」「中等の公単紙」「下等の扛連紙」と区別し、装幀においては第一号から第三号まで、それぞれ緞子、金黄の花綾、金黄色の重表絹のような区別が決められていた。[33]北蔵は欽定大蔵経という権威を持ち、その表装も宮廷の装幀制度と一致していると考えられる。同じく仏経であっても、その内容や重要視の度合いにより等級が付けられ、さらに表装でその区別を表したかもしれない。今後、智果寺蔵北蔵における経・律・論および注釈書それぞれの表装と用紙を分類して考察することで、大蔵経の装幀における等級性が明らかになることが期待できよう。

おわりに

以上、本稿ではこれまでほとんど学界に知られていなかった智果寺蔵永楽北蔵及びその表装について検討を加えた。智果寺蔵永楽北蔵は万暦帝及び慈聖皇太后が下賜したものであり、この背景には慈聖皇太后の篤い仏教信仰がある。その表装は当時の最高水準の染織品と言ってよい。これらの染織品は当時の日明貿易によって舶載され、後に名物裂と認定された作品と類似するところが多い。また、仏教経典における重要度により表装に差別が設けられた傾向がみら

れる。智果寺蔵永楽北蔵は現在まだ復元作業が行われているので、実際に拝見できるのはわずかである。復元作業の完成を待って、あらためて全面的な考察を行い、技法分析、文様の系統的検討、名物裂との比較研究を通して、更なる結論を下したいと思う。日中の染織史研究の進展に僅かでも資するところがあれば幸いである。

註

（1）西村兵部『名物裂』（『日本の美術』第九十号、至文堂、一九七三年）による。

（2）小笠原小枝「名物裂――中世舶載染織品のタイムカプセル」（五島美術館学芸部編『名物裂――渡来織物への憧れ』、五島美術館、二〇〇一年）による。

（3）『明史』によれば、内承運庫は金銀紗羅象牙珊瑚などの類を蔵した（沈従文がいう内庫はおそらく内承運庫を指すのであろう）。倉庫はほかに承運庫、広恵庫、広盈庫、贓罰庫を含め十庫があった。承運庫は黄白と生絹、広恵庫は巾帕・梳篦・刷子民・銭貫・鈔錠の類、広盈庫は紗羅と帛匹、贓罰庫は没収された官物を管理する官庫である。なお、『酌中志』によれば、広盈庫はなく、これに広運庫（黄紅など色の平羅熟絹、各色の杭紗と綿布を管理する）を加えている。張廷玉等撰『明史』（中華書局、一九九九年）、劉若愚『酌中志』（商務印書館、一九三五年）を参照。

（4）沈従文「題記」（李杏南編『明錦』、人民美術出版社、一九五五年）による。

（5）以下の大蔵経の歴史については、大蔵会編『大蔵経――成立と変遷』（百華苑、一九六四年）、椎名宏雄『宋元版禅籍の研究』（大東出版社、一九九三年）、野沢佳美著『明代大蔵経史の研究』（汲古書院、一九九八年）、李富華・何梅著『漢文仏教大蔵経研究』（宗教文化出版社、二〇〇三年）などを参照。

（6）仏教が中国に伝来した当初、すでに製紙法は発明されていたが、まだ一般に普及せず、仏典は縑や帛に書写していたようである。紙を用いた経典は、六朝から隋唐に及んで益々盛んとなった。僅かな現存品はすべて紙で表装された巻子本であるが、当時の装幀に関する文献からみれば、染織品で表装された可能性もある。

（7）木版印刷が盛んになった宋代から、仏典が巻子である理由を失って、その形式は折本へと移行してしまう。宋の勅版大蔵経は世界で十巻程度しか残っていないとされる。椎名宏雄『宋元版禅籍の研究』（大東出版社、一九九三年）、キムハクスン「日本に残る初彫大蔵経木版本」（『韓国の藝術と文化』一八、二〇一一年）を参照。

（8）初彫高麗大蔵経は、中国の宋の勅版大蔵経を基にして製作されたものである。しかしこの版木は、モンゴルの侵略による火災で一二三二年頃に焼失してしまった。高麗が十三世紀に二度目の版木、つまり再彫高麗大蔵経を作り、現在まで海印寺に保管されている。現存する初彫高麗大蔵経（韓国三百巻、日本の京都南禅寺一八〇〇巻、対馬歴史民俗資料館六〇〇巻）は、元来紙で表装された巻子本であるが、その後折本に改装されたものも多い。再彫高麗大蔵経は韓国の江原道月寺蔵本のほか、ほとんど日本（大谷大学図書館四九九五巻、増上寺六五九〇巻）に収蔵されている。いずれも紙で表装された折本であり、改装されたかどうかは、詳細不明。契丹大蔵経は、一九八二年に山西省の応県にある古刹、仏宮寺の木塔に安置された仏像内から、十二巻が発見され、房山雲居寺の『石経』との関係なども確認された。丸木の軸、絹の縹帯で装幀された巻子本である。高麗大蔵経の詳細は、キムハクスン「巻物の高麗こうぞ紙が伝える知恵　初彫大蔵経の韓国内保管状況」（『韓国の藝術と文化』十八、二〇一一年）、「日本に残る初彫大蔵経木版本」（『韓国の藝術と文化』十八、二〇一一年）、「特集　韓国の世界遺産　八万大蔵経と海印寺」（『月刊韓国文化』二九三、二〇〇四年）を参照。

（9）金版大蔵経は、一九三六年に山西省趙城県広勝寺で発見され、現在中国国家図書館に収蔵されている。全部で四八〇〇余巻があり、山吹茶色の紙で表装される巻子本である。詳細は方自金ら「『趙城金蔵』発見始末及其版本問題」（『図書館建設』第十二期、二〇一〇年）を参照。

（10）崇寧万寿蔵は、元豊三年（一〇八〇）～政和二年（一一一二）慧空大士冲真らが発願し、福建省福州の東禅等覚院で開版した。五八〇函六一〇八巻がある。崇寧二年（一一〇三）に宋徽宗がこれに「崇寧万寿大蔵」と賜名し、勅版大蔵経に準ずる扱いとなった。印経活動は元代まで及んだのである。毘盧蔵は、政和二年（一一一二）に本明禅師が発願して福建省福州の開元禅寺で開版し、紹興二一年（一一五一）に完成された。五九五函六一三二巻がある。日宋・日元貿易により多数の毘盧蔵が日本に伝来した。その多くは崇寧・毘盧二蔵の混合版である。杭州蔵は、至元十三年（一二七七）に白雲宗の僧俗が発願して浙江省杭州の普寧寺で開版し、二七年（一二九〇）に完成された。五五八函六〇〇四巻がある。増上寺などで収蔵され、丹色の紙で表装されている。思渓蔵は王士一族の浄財で浙江省湖州思渓の円覚禅院で開版され、紹興二年（一一三二）に完成された。五五〇函がある。増上寺、輪王寺、喜多院、長谷寺、大谷大学などに収蔵され、紙で表装されている。磧砂蔵は紹定四、五年（一二三一～一二三二）頃、蘇州磧砂の延聖禅院で開版された。五九一函六三六二巻がある。西安の臥竜寺・開元寺、山西省太原の崇禅寺で全蔵が発見された。日本の東洋文庫にも二四巻が収蔵されている（清音寺旧蔵）。黄色い紙で表装されている。以上の私版大蔵経はいずれも折本である。

（11）天海版大蔵経は、寛永十四年（一六三七）に天台僧天海が発願し、徳川家光の援助をうけて東叡山寛永寺に経局を設置して開板したものである。全部で六六五函一四五三部六三二三巻がある。主に思渓版蔵経、一部に普寧寺版蔵経・嘉興蔵を底本とする。木活字は現在寛永寺に収蔵されている。三〇余部が印刷され、寛永寺・青蓮院・叡山文庫などにも収蔵されている。主に紙で表装された折本であり、一部は方冊本である。黄檗版大蔵経は寛文七年（一六六七）に黄檗宗鉄眼が黄檗山万福寺宝蔵院で開版し、天和元年（一六八一）に完成したものである。全部で一六五〇余部六九五〇余巻を数える。嘉興蔵の覆刻本を底本とする。初刷本は、後水尾上皇に献上され、滋賀県の正明寺に伝わっている。明治初年頃に至ると、日本の約二千箇所に納経され、国外にも輸出された。版木は昭和三二年（一九五九）に重要文化財に指定され、宝蔵院の収蔵庫で保管されている。

（12）洪武南蔵は、一九三八年に四川省崇慶県光厳禅院（上古寺）で発見され、現在四川省図書館に収蔵されている。正蔵は六三六九巻があり、続蔵八七七巻がある。いずれも紙で表装された折本である。

（13）永楽南蔵はその後多くが散逸したが、今日まとまって伝わっているものに、中国の国家図書館蔵本と甘粛省図書館蔵本がある。その他、天津図書館、蘇州西園寺、福建泉州開元寺などにも一部収蔵されている。現在確認したところ、紙で表装されたものが多い。

（14）武林蔵は、永楽末年信徒が資金を寄せ集め杭州（武林）で刊行した私版大蔵経である。一九八二年に発見されたが、十七巻の折本しか現存しない。磧砂蔵に非常に似ており、磧砂蔵の覆刻と補刻であるという説もある。径山蔵は、万暦二一年（一五九三）に杭州径山の興聖万寿禅寺で開版された私版大蔵経である。清代にも開版され、印刷が続いた。現在中国では、故宮博物院、遼寧省図書館、青海省図書館などに収蔵されている。日本にも四十～五十蔵が伝来し、現在鎌倉光明寺・西蓮社などに収蔵されている。冊子体で刊行されたものである。

（15）山口県快友寺蔵本は、黄色い厚紙を芯として浅葱色の化粧紙で表装されている。

（16）楊牧之「《永楽北蔵》重刊序言」（『中国図書評論』、二〇〇〇年第五期）を参照。

（17）慣例にしたがい、巻と表記するが、実際の形態は折本である。以下の諸蔵本も同様。

（18）許磊「我国古代寺院蔵書簡論」（『文献』九四、二〇〇二年第四期）を参

照。

(19) 許彤「重慶図書館蔵『永楽北蔵』探源」（『図書館工作与研究』、二〇一〇年第五期）を参照。

(20) Darui Long, (2005) Two Rare Buddhist Books in the End of the Ming Dynasty, CSA Academic Perspective Vol.1, pp.59-63、及び Darui Long, (2006) The Management of Woodblock Engraving of Buddhist Canon in China, Hsi Lai Journal of Humanistic Buddhism vol.7, pp.329-351による。

(21) 明代の粧花緞は、経五枚繻子組織の緞子（明代末期から清代の初めにかけては経八枚繻子組織の緞子が流行した）の地に、さまざまな色の小さい縫取杼ですくって色彩豊かな絹糸の文様を織り込み、長織杼（織幅全体に渡る）で地緯を織ったものが多い。なお、緞子という用語は中国においても日本においても、曖昧のまま使われてきた。現代の中国の緞子は、広義には織物全般を指すが、狭義には繻子織物全般をさすとされている。日本では、特に名物裂の世界における緞子という用語にも、広義と狭義の意味がある。吉田雅子によれば、広義には、経緯に異色の色糸を使い、地と文様が異組織で織られているのであれば、繻子組織だけでなく、斜文や錦や浮織のものまでが緞子に含まれる。狭義には、地を経五枚繻子組織、文様を緯五枚組織で織り出したものを限定して緞子という（吉田雅子「明末清初を中心とする中国と日本の繻子組織――組織定義、規準作例、織物分類、織物名称、生産体制」、『京都市立芸術大学美術学部研究紀要』五一、京都市立芸術大学美術学部、二〇〇七年）を参照）。

(22) 張鵬翼等纂修『中国方志叢書・華北地方』第二六五号、清光緒二十四年（一八九八）抄本、成文出版社有限会社印行）による。

(23) 野沢佳美「明代北蔵考（一）――下賜状況を中心に」『立正大学文学部論叢』一一七、二〇〇三年）。

(24) 筆者が現地調査の際に寺の関係者から聞いた伝承。洋県には、この伝説を内容とする浮彫の作品もある。典拠は不明。

(25) 修復の作業は二〇〇二年一月十一日から始まった。西北大学仏教研究所所長の李利安が率いる修理プロジェクトチームは五人で構成されている。長期的に古文書の整理と文献の研究に取り込んできた南京師範大学の黄征教授が特別招聘された。

(26) 守田公夫『名物裂の成立』（奈良国立文化財研究所、一九七〇年）による。

(27) 『今井宗久茶湯日記』（千宗室編『茶道古典全集』第十巻）永楽七年（一五六四年）の条、及び『神谷宗湛日記』（千宗室編『茶道古典全集』第六巻）天正十五年（一五八七）の条による。

(28) ケウロク緞子は緞子の中でも最も古い記録のある名称の一つである。「ケウロク段子」の名は『今井宗久茶湯日記』と『神谷宗湛日記』の計八箇所に特筆されている。ケウロクは今日的に読むとキョウロクであり、享禄年間（一五二八～一五三一）に渡来したものを指す。なお、必ずしも享禄年間に舶来されたことを指すのではなく、古様な趣の緞子であることを示すためにこの名を当てた可能性もあるとされる。

(29) 矢部良明『やきものの鑑賞基礎知識』（至文堂、一九九三年）、矢部良明『元の染付』（平凡社、一九七四年）による。

(30) 明朝では最初宮廷で使用する織物を製造する機構「内織染局」と、国家の公用に使用する織物を製造する機構「外織染局」とが区別されていた。外織染局は工部に直属する織染局で、南京と北京にそれぞれ設けられた。地方の織染局は通常杭州や蘇州のような絹織物の名産地に配置された。永楽年間に活況を呈していた外織染局は次第に制度が崩れ、工部直属の織染局や地方の織染局でも宮廷用や公用の織物が生産されるようになった。

(31) 周密『斉東野語』（中華書局、一九八三年）による。

(32) 緯絲のこと。一般の経糸と緯糸を相互に浮き沈みさせて織る方法と違って、緯絲織は平紋の木機を使って、「通経断緯」（機台に張った経糸に対し、緯糸は文様に従って部分的に織り嵌めていき、織幅いっぱいの通し糸とならない織り方）という技法で織り上げる。画面の構成は緯線の変化によるものであり、織り上げた図案は表裏両面とも同じである。また、色遣いの緯糸で文様を織り上げるので、緯糸はそれぞれ連結しないため、モチーフ

の周囲にのこぎりの歯のような隙間が出来るので、「緙絲」は「刻絲」ともいう。

（33）小川貫弌『大蔵経――成立と変遷』（大蔵会編、百華苑、一九六四年）による。

【図版出典】

図1・2・3　筆者撮影

図4・13　南京師範大学黄征教授撮影

図5・6・11・14　守田公夫『名物裂』（株式会社淡交社、一九六六年）

図7・8・9・10・12　西村兵部『名物裂』（『日本の美術』第九十号、至文堂、一九七三年）